

---

# 東方捜真遊 ~Volost of a true fantasy~

アイザック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方 捜真遊 ~ Vol 0 st of a true fant a

S Y }

### 【Zコード】

N7784P

### 【あらすじ】

突然別世界・・・東方の世界に転移してしまった主人公 墓人。そして、友人諒助。元の世界とは全然違う世界に戸惑いながらも、元の世界に帰ろうとするが、帰ろうとするうちに幻想郷でトラブルに巻き込まれていく。

独自設定ありで、時代区分は紅魔異変が始まる前です。

オリ主であり、オリキャラが多少出てきます。

また、東方のキャラの口調や性格、幻想郷の世界設定は作者の妄想  
が多量に含まれています。

「俺はこんな作品でも読んじまう奴なんだぜ?」ってな、良い人の  
方は、これから末永くお付き合いください。

更新は不定期となります。

## 第1話 始まり（前書き）

この小説は、東方の一次創作の処女作品です。作者は、あらすじでも見てわかる通り文才がなく、また、更新もとても不定期になっています。こんな、作品でもよければ、見ていてください m( )m

## 第1話 始まり

「・・・鬼人。」

俺を呼ぶ声が聞こえる。恐らくは、俺を起こうとしている俺の友人だろ？。

「・・・え、起きろって」

だが、起きるのを苦手としている俺は、起きたくはない。正直、放課後まで寝ていたい気分だ。故に無視に決め込む。

「・・・鬼人。・・・かいと。・・・鬼人ッ」

うぬう、しつこい・・・

何時もならば、こじら辺とで諦めて、午後の授業もふけるのだが・・

「・・・起きろってば。」

まだ、言うのか・・・

ここまで、されると流石に目は覚めている。

だが、ここで起きるのも、なんだか負けた気がする。故に、徹底抗戦に決め込む。

「・・・起きろーーー！」

「ゴチン！ー！」

「イツテエエエツー？」

俺は、頭が力チ割れそうになるくらいの衝撃を受け、とつさに目を開けると、目に飛び込んで来たのは、

「やつと、起きたのかよ。まつたぐ、・・・起きるまで優しく見守つてた僕に感謝しろよな〜。」

真っ青な青空をバックに見慣れた俺の親友 ひぐちりょうすけ 横口諒助がだった。

「優しく見守つてたつて・・・殴つて起こした奴が言つセリフかよ・・・」

殴られて痛む頭を押さえながら俺は諒助を睨む。

「いやいや、僕は殴つてないよ。ただちょっと手が滑つただけだ。」

そう言つて俺にニヤニヤとしたいかにも頭が悪そうな眼鏡面を見せてくれる。

正直に言つと・・・まるで百足が百匹、瓶の中に詰め込まれて蠢いているの眺めてる氣分だ。

ぶつちやけると、キモイ。

「おい！鬼人！！僕はキモくない！！ただ、ちょっと残念なだけだ！！」

「お前、勝手に人の心を読むな。それと、キモいと残念つてあんま違わないだろ・・・」

俺は何故か胸を張つて自信満々にしている諒助に呆れた目線を送く

る。

「・・・はつ！―また自分の事を自分でキモいつて言つてしまつたのか・・・・齶だ死のう・・・」

そう言つて、地面に”の”の字を書きだす諒助。

何時もの事だから放つておく。しかし、こいつも憲りないよな・・・学習というものをしないのか？

まあ、所詮は諒助の事だ、考えるだけ無駄つて物だろう。まだ、教室に戻つて寝てる方が有意義な時間の使い方つてもんだ、と思い教室に戻ろうと体を起こす。

何時も通りなら、そこには学校の給水タンクがあるはずだつた。だが、この日の俺が見たものは、学校に、屋上に決してないものであつた。

「・・・木？」

そして、俺は、異変に気付く。

「――・・・何処だ？」

見慣れた学校の屋上から、周りは鬱蒼と木々が生茂つた森に変わつていた。

「？？？俺つて、確か・・・昼休みに屋上に来て、飯食つて、寝てたよな。屋上で・・・」

そつ、俺は諒助と供に何時ものように飯を屋上で食つて、何時ものように昼寝をしてたはずだ・・・  
なのに、俺は今見知らぬ所にいる。

「ふむ・・・意味不だな。」

「さつきまで、僕たちは確かに学校の屋上で昼寝をしていた。しかし、起きたら学校の屋上から、自然たつぱり森の中にいた・・・というわけさ。兎人・・・どう思つ?」

いつの間にか復活していた諒助が俺にドヤ顔で問いかけてくる。

「いや・・・どう思つも何も、とりあえずこじ何処だよ・・・てか、そのドヤ顔やめる。」

「だが、断る。・・・まあ、学校の近くじやないことはたしかだね。」

俺たちの学校は東京都のド真ん中にある高校だ。確かにその周りにこんな鬱蒼とした木々が生茂っている場所があるはずがない。

「なあ、諒助。俺達って・・・夢遊病だつたつけ?」

「僕の記憶が正しければ、いたつて健康そのものだったと思つナビ。」

「・・・夢遊病の可能性が高くなつたな・・・」

「なんでだよ!?」

「勘違いするなよ、諒助。別にお前を信じれないといつわけじやないんだ。信じれなのは、お前の記憶だ。」

「どつちも、どつちだよ!?」

「だが、安心しろ。俺自身も夢遊病だった記憶はない。これで、お前の記憶が正しかったことが証明されたな。」

「お前何様だよ!?」

「・・・周りは木々ばっかりだな・・・本格的な森なのか?」

「無視すんあああああああああああああああああああああああツー・・・」

ギヤアギヤアとまるで壊れたテレビが発するノイズのような声が響き渡るが、動物一匹すら動く気配がない。

「りや、スゲー深い森じやないのか？」

「マジか。。。

思わず独り言を呟きながら俺は、信じられずに周りを見渡す。だが、やはりあるのは木々のみであり、完璧にここが学校の屋上どころか、俺達の町の近くでもないことを証明していた。

「まさか、生きてるうちにリアル遭難をするとはな・・・とりあえず、辺りを探索してみよう。人がいるかもしれない。行くぞ、諒助。」「・・・わかったよ。てか、こんな状況になつても僕の扱いは変わんないんだね・・・」「ああ、そうだ。」「断言しないでよー。」

未だに信じられないが、どうやつたつて現実は変わらない。  
とりあえず俺たちは人を見つけることから始めた。  
だから、

探索を始め、日が傾くぐらいの時間を歩いているが、それでも人所  
か動物一匹も見つけることができない有様だった。

「はあ！はあ！全然！見つかんないな！！」

「ふう、まつたぐだな。」

初めはテンションがかなり高かつた諒助もさすがに疲れてきたのか、先ほどから、息切れを起こしている。まあ、もともと体力がないほうだ。この山道のような場所を延々と歩くのは疲れるだろう。

帰宅部ながらも、週に一回はジムに通っている俺もさすがに疲れてきている。体力はそちら辺の高校生よりもあると自信はあるが、この山道はキツイ。

未開の森なのか、整備されている道など一つもなく、延々と獸道を歩き続けるのは堪えるな。

「あの場所で休憩するか・・・」

「そう！だな！！」

少し先に丁度開けた場所があつたため、そこで休憩することにした。

「はあー、つつかれた！！」

バタン！！

と息も絶え絶えとなつていた諒助は地面に大の字になつて寝転がつた。相当疲れてるな・・・  
かくいう俺も諒助ほどではないが、疲れたのは隣に寝転がぶ。

「確かに疲れたな・・・しつかし、お前の体力なさは相変わらずだな。」

「うつせえ！－俺はクーラーのついた部屋でずっとパソコンいじればいいんだよ！－」

かなりな駄目発言だが、こいつはかなり本気だ。夏休みにこいつの部屋に遊びに行つたら、クーラーをガンガンにつけて、パソコンば

つかいじつてやがっていたので、その頃、バイトも休みに入っていたので退屈だった俺は、諒助を鍛えてやろうと思い、俺がこいつを無理やり海に行かせて、溺れかけさせたのはいい思い出だ。

「あれは、本当に死ぬかと思つたぜ。海はなんかより、やつぱマイルームの方がいいぜ。」

「だから、お前は俺の心を読むな。」

「いや、違う。俺は読んぐるんじゃない……感じているんだ!!」

「はいはい。」

しばらく、くだらない話を続けて俺たちは体を休める。

それからしばらくして、ようやく息を整えた俺達は暗くなる前に人を見つけるか、森を抜けるためにさつと出発することにした。此処は、森の中だ。暗くなつて、肉食の動物にでも襲われたら敵わないからな。

「急ぐぞ、諒助。」

諒助に声を掛けながら俺は立ちあがり、砂や葉が付いた制服を払つた。

「はあ～、だりいよ～。もう少し、休んでいかね？」

「それもいいが、この森に人食の動物がいても知らんぞ。」

「大丈夫だつて、さつきから動物一匹もいないし。それに、人食の動物なんていなつて。」

「お前は・・・それはフラグだろ・・・」

「あ・・・」

「・・・」

「・・・休むか？」

「いや……わざと行けりや……速く行けりや……おびやび行けりや。」

ヤケになつた諒助は、猛然とやる氣を出し、今までの態度が嘘のように感じるくらいに燃えていた。

余談だが、諒助は俗に言うオタクであり、こんな風に脅してやれば  
ものすつごく真面目に受け止める。最早、現実と一次元の境界が分  
からなくなつてしまつてゐるほどの末期なのだ。

「じゃ、行くか。」

そう言つて俺たちは探索を再開した。

「やつぱ、何も見つかんないなあ！」

「まつたくだな。動物一匹もいないし。」

俺たちは先ほどの休息から、おおよそ一時間ぐらいだろうか（一人とも時計を持つていないので正確な時間がわからない）歩き回った  
というのに、未だに何も見つけられずについた。

「はあー、はやく帰つてゲームしてえー」

と言いながら、ふらふらと歩き続ける諒助。かなり限界に近付いて

いふと見える。

「・・・あれ！？あの木・・・スクール水着を来た小学生に見える  
！――」

・・・最早限界ではなく、臨界点を突破していたらしい。

「まあ、気持ちをわからんでもないけどな。」

正直俺も限界が近い。あれから、ずっと歩き続けていたんだ。そり  
や、限界も来るもんだ。

「ふう。」

一息ついて空を見上げる。真っ赤に染まつた空には、何匹かの鳥が  
飛んでいた。思わず、その動きを田で追っていたら、何か赤い物を  
目の端が捉えた。

何処かで見たことがあるような気がするのだが、名前が思い出せな  
い。

「おい、諒助。あれ何だと思う？」

そう言つて俺は、諒助に赤い物がある方向を指し示す。

「うーん？あれって・・・鳥居じゃないか！――」

「ああ、鳥居か・・・ってことは、あそこに神社あるのか！？」

神社がある！――といふことは、人もいる！――といふ患者に一瞬で辿  
り着いた俺達は、一目散に鳥居が見える方向を田指して走り始めた。

「おおーーまじで神社があつたーー！」

鳥居を左指して走り続け、しばらくして俺たちは、無事神社に着くことができていた。

「やつたな、鬼人！！ひたすらに歩き続けたかいがあつたつてもんだよ！！」

「 そ う だ な 。 と り あ え ず 人 が い る か 調 べ な い と 、 、 、 」

とりあえず、俺達が人を探そうとしたその時、

「あんたたち、此処で何してんの？」

紅と白の巫女服を着た少女がいた。

## 第1話 始まり（後書き）

とつあえず、一話でした。初めの文は分かる人にはわかる、とあるゲームの一文を載せてあります^ ^  
さて、投稿してしまったわけなのですが、正直続していくかが心配です。orz  
ストーリーは大体考えてあるのですが、それを受肉していくとなると・・・

やつてひじやんかよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

## 第2話　I-Iは別世界

「…………」「  
「すずつ…………ふう～」「  
「すずつ…………」

俺たちは、今お茶を御馳走になつてゐる。上から諒助、俺、そして先ほど出会つた巫女だ。何故か先ほどから何もせすじつと正座している諒助が心配だが、まあ、それは置いておこう。

俺たちは、巫女に声を掛けられた後、神社に案内されて、巫女の家の居間に通されていた。

ここに来るまでに、何度もかしゃべりかけてみたのだが、

「いいから、黙つて着いてきなさい」

と言われ、ここまで連れて来られた。着いてからは、お茶を出され、それでも巫女は黙つていたので、俺たちもすつと黙つてお茶を飲んでいたのだ。

しかし、このお茶うまいな。癖になりそうだ。とか思つているとやつと巫女が話しかけてきた。

「私の名前は博麗　靈夢。I-Iの博麗神社の巫女よ。あんた達の名前は？」

「俺の名前は、瀬尾　鬼人、そしてこつちは樋口　諒助だ。」

「鬼人に、諒助ね。じゃあ、聞くわ。貴方達は、どうしてここに来たの？」

博麗が聞いてくる。

「いや、森を探検していたら、いつの間にか迷子になっていたんで助けを求めようと人を探していました。あの鳥居が見えたのんで、とりあえず此処までに来たんだ。」

正直に話そうかと思ったのだが、学校の屋上で昼寝してたらいつの間にか森の中について、迷つてました。なんて、言えるはずがない。言つたとしても、頭がおかしいとか思われるだけだろう。なので、森を探検していたということにさせつてもらつた。正直、この年で勝手に迷子になるのも恥ずかしいのだが、頭がおかしいとか思われるよつかはましだらう。

「アラ。・・・」

博麗はそれっきり、黙りこんでしまつた。またもや、お茶をする音だけが居間に響く。

質問もされたし、Jリカもして良いだらうと思つて、博麗に話しかける。

「すまんが、博麗。Jリは何処になるんだ?」

とつあえずは、現在の場所を聞いてみる。なるべく知つてゐる所だと帰りやすいのだがな。とか思つてゐると、

「Jリは幻想郷よ。」

と、来たこともない地名が返つてきた。幻想郷? そんな地名あつたか? 名前的には日本の何処かなのだろう。だが、生憎俺は聞いたことがない地名だつたので、都道府県を訪ねてみると

、

「トドウフケン? 何それ?」

との事だった。今時、都道府県を知らない人などいないだろう。つまり、ここは俺が知ってる場所じゃないのか?

だが、話している言葉は日本語。さらに、幻想郷って名前もおそらく日本語だろう。どういうことだ?

俺が混乱していると、博麗がとんでもないことを言い出した。

「やっぱり、そうね。・・・貴方達は外の人間ね。」

「外の人間?」

「そう。ここは、妖怪と人間が住む場所、幻想郷。貴方達が住んでいる所とかけ離れた場所。要するに、別世界みたいなものね。」

「・・・は?」

妖怪? 別の世界? 一体何を言つてているだ?

「その服からしても、やっぱり外来人でしょうね。まったく、また紫の奴が連れて来たのかしら?」

「すまんが、博麗。言つてる意味がわからんのだが・・・」

「要するに、貴方達は別世界にいるのよ。普段は、此処は来ることができるない場所だけども、時々居るのよ。此処に来る外来人が。」

知らない場所だなとは思つていたが、まさかの別世界とは・・・ということはまさか・・・

「俺達は帰れないのか!?」

「いいえ、ちゃんと帰れるわよ。多分貴方達は私の知り合いに面白半分に連れてこられただけだと思うから、さつさと帰すように言ってあげる。ちょっと待つてなさい。」

そう言うと博麗は立ち上がり、居間から出て行つた。

よ・・・良かつた・・・いきなり別世界とか言われた上に、帰れないとか言われたら、正直軽く絶望しちだらう。

別世界とか言われて茫然としていたのか、ずっと黙つていた諒助に話しかける。

「よかつたな、諒助。帰れるつてよ。」

「・・・」

「?どうした?」

「・・・」

おかしい。テンションが高いが取り柄の諒助が何も話さない。まさか、ショックが大きすぎて気絶したのか!?

慌てて諒助の様子を見ると、

「ணண」

寝ていた。しつかりと正座したまま寝ていた。これでもか!?ってほど目を開けたまま寝ていた。。

・  
・  
・

ムカついたから、あつついお茶を膝に掛けた俺は別に悪くないと思う。

「あつちいいいいいいいいい!!--!」

「うるせえぞ、諒助。ここは人様の家だぜ。ちょっとは、静かにしろよ。」

「いやいや、膝がスゲー熱いんですけど!?まるで、熱湯掛けられたみたいに濡れてて、熱いんですけど!?」

「何言つてんだよ。何処にも熱湯なんかないじゃないか。」  
「気のせいだ、気にすんな。」

だ、  
気にすんな。  
」

「いや、お前の手に代わりになら  
たって、お前がやつただろー?」

「・・・やつと、  
帰れるな諒助。」

「話そらすなよ……帰れるって何!? 話が見えないんだけど……」

あーだーこーだ言う諒助を何とか大人しくさせ、現状を説明する。

「何か、この世界は俺たちの世界とは違う別世界らしく、此処には俺たちの居る場所ではないらしい。」

۱۷۰

博麗の知人に連れてこられた  
で、何で此処に居たのかと云うと、  
らしい。どうやつてかはと考かく。  
一

「うん。」

「で、今からその知人に俺たちを歸すように言つていいらしい。」

卷之三

「……………」

Digitized by srujanika@gmail.com

一通り説明が終わつてからの「マイツのトーンシジョンの上がりよつは傍から見てズン引きである。

正直、エイツが寝ててこの痴態を博麗に見られれずに良かったと思つてしまつた。

卷之二

「良かつたな……鬼人……これでやつとエロ……じゃなくてギャ

ルゲーできるぜ！！」

「いや、それはお前のことだろ……」

こんなに喜んでいる理由がこれだ。変態以外の何物ではない。こんな奴が俺の親友とは、少々・・・いや大変残念である。

黙らせるために顔面にお茶をかけた俺は悪くないと思う。

それから數十分待つこと、ようやく博麗が一人で帰ってきた。  
博麗は何も言わずに座り、お茶を飲み始めた。

「博麗、俺たちを此処に連れて來たという人はどうしたんだ?」「呼んだわよ。もう少しで來るんじゃないかしら?」

そう言って、再びお茶を飲み始める博麗。

なんだか、マイペースな奴だな。  
とか思つていると、諒助の奴が俺  
を肘で突いてきやがつた。

「何だよ？」

「なあ、博麗つて子。可愛くね？」

・・・いきなり世迷言を言い出す馬鹿。<sup>りょううづけ</sup>普通田の前に本人が居るのにそういうこと言つつか？

だが、まああコイツが言つてることはわかる。

博麗は、まだ少女といった具合の体つきだが、バランスが取れていって、スタイルがいい。さらに、まるで人形のように綺麗な顔は無表情だが、それがまた彼女の凛々しさを表わしていてとても似合っている。

俺たちの世界で言えば、間違いなく美少女の類に分離されるだろう。だが、俺はあまり珍しいとは思わない。

なぜなら、

「・・・なあ、鬼人。よく見えてみると博麗って、悠夢に似てねえか？」

「ああ、そつくりだな。」

そう。俺たちのクラスには、夕凪 悠夢っていう女子がいる。ソイツが、博麗にとても似ていた。

性格的なものは、真逆で悠夢はお銚子もので、騒がしい奴だ。俗に言うムードメーカーってやつだ。

何かとお世話好きで俺も何度もお世話になつていた。クラスだけではなく、学校全体にその姿と性格で知られている有名人だ。

実を言うと、入学当初。俺も大半の男子と同様に悠夢のことが好きになつたのだが・・・告白する勇気もなく、もうその気持ちも今では叶わないと知つている。

なぜなら、俺の一個上の先輩と付き合つてゐるらしいからだ。クラスの奴らが言つには、いつも登下校などは一緒にしてて、この前は休日に一緒に映画なんかに行つていたらしい。

その先輩が普通だったら、他の男子からボコボコにされている所だが、その先輩は一度見てみたが、俗に言うイケメン。さらには、大

学病院の教授の息子らしい。

当然、まるで神に愛されているような奴に敵うわけないと大半の男子を絶望していた。

俺は初めから叶わない恋だなあと思つていたので、あまりショックは受けはいなかつたが、やはり少しだけ悲しくなつていたのは良い思い出だ。

と、淡い初恋について考えていると、博麗が急に

「やつと来たわね。遅いわよ、紫。」

立ち上がり、何もないところに視線を向けた。

「鬼人・・・誰かいるか?」  
「・・・いや、誰もいないな。」

俺たちも其処に視線を向けてみるが、誰もいない。まさか、博麗つてヤバい奴だったのかと思つていると、

「あら?」これでも急いできたのに。普段の私と比べて。

目の前の空間に亀裂が生まれ、

「久しぶりね、靈夢。」

日傘を持った女性が出てきた。

## 第2話 IJ-1は別世界（後書き）

今見てみると、スゲー詰めて書いているなと思いました。これって  
やつぱり、もうちょっとスペース空けたほうがいいのかな?  
よしやく一話用に行けた。やっぱ、考えている事を文字にするって  
難しいなと思いました。

### 第3話 帰れる手段（前書き）

第8回東方人気キャラ投票・・・第1位は・・・博麗 靈夢！！

いや～、やっぱり靈夢の人気は不動ですね～～確か、これで人気投票三連続1位じやなかつたつけ？

もちろん、私も靈夢に投票しました！！（笑）

ゆかりんは残念ながらも、14位・・・個人的に好きなキャラなので少し残念です・・・段々と順位が下がっている気がするなあ～・・・きつと氣のせいですね！！

### 第3話 帰れる手段

「まつたく、急に来い！－だなんて・・・そんなに私に会いたかったの？」

「違うわよ。あんたはそうでも言わないと来ないでしょ？」

「さすがね、靈夢。私の事よくわかつてるわ。」

博麗と親しげに話す目の前の女性のあまりな登場の仕方に俺たちは茫然としていた。

いきなり目の前の空間が歪んだと思つたら、そこからこの女性が出てきたのだ。

どう考へても真つ当な人間でないことは確かだ。

「・・・なあ、鬼人。俺は・・・夢を見てるのかな？目の前で信じられない光景が広がつていたんだけど・・・」

と、諒助が言つてくる。正直、「コイツがこんなに茫然としていることが信じられないが、確かに先ほどの現象はどんな人であれ、度肝を抜かれるだろう。

「確かに。俺もビックリしたぜ。」

「そうだよな。あんな・・・あんな俺の好みのど真ん中ストレートの女性がいきなり俺の目の前に現れるなんて！－！－！」

「そつちかよ！－？普通驚くことはそこじやなくて、あの空間が歪んだりしてたことだろ？！－？」

思わず素で突つ込んでしまつた・・・「コイツ・・・さつきの現象について何か思わないのか？」

「うんな些細なことはどうでもいいんだよ……それよりも魔人！！」

あの貴婦人はフリーかな？」

「……そうだよな……お前はそういう奴だつたよな……」

「コイツの馬鹿さに呆れないと、後ろからもの凄い視線を感じた。まるで”俺”という存在を隅々まで見透かされている……そんな感じの視線だ。

あまりの不気味さにサッと後ろを振り返つてみると、女性が俺たちの事をじっと見ていた。

思わず唾を飲み込んでしまう。そんな圧迫感が女性の視線にはあった。

「魔人……わかるか？」

「……ああ。」

その感じはどうやら諒助も感じたらしい。先ほどのふざけた雰囲気が変わっている。

「あの貴婦人……どうやら俺の魅力に一目惚れしたらしいな……」

「……は？」

「ふつ、あんな情熱的な視線をあんなにも向けてくるなんて……俺も罪な男だぜ。（メガネクイツ……」

「お前、もう黙つてろ。」

馬鹿に無駄な期待をしていた俺が間違つていた。コイツは、どこまでいっても馬鹿らしい。

呆れて思わず頭を抱え込んでしまう。何でこんな奴と親友になつたんだろう？

それはともかく、彼女は絶対人間じゃないよな。どう見ても登場の

仕方が、人の範疇を超えてるし。

博麗が言つには、ここは人間と妖怪が住む場所らしいから、彼女は妖怪なのだろう。

じゃないと、さつきの現象が説明つかないし。とか、考えていると・  
・

「そこの貴婦人・・・僕と結婚してくださりませんか？」

「！？あの馬鹿！？何時の間に！？」

一瞬目を離してただけなのに諒助の野郎・・・その一瞬で女性の目の前に跪いていた・・・  
なんで、こうくだらない事に無駄にハイスペックになるんだ！？

「・・・靈夢。この人間はどうしたの？・・・まさか・・・思い人  
？」

と言つて、博麗に問いかける女性。諒助はまるつきりの無視である。

「違うわよ！―まったく、私は博麗の巫女よ。そんなもの作らないわ。と言つより、こいつ等の事ならあんたが一番知ってるんじゃないの？」

諒助と恋人かと聞かれた瞬間、即座に大声での否定。しかも、嫌そ  
うな表情付き。これは、きつい。

幾ら好きではないからといって、あんなに否定されるとは・・・諒  
助、哀れ・・・

案の定、アイツは体育座りで”の”を書き始めるという始末。可哀  
そうに・・・・・・

「さあ？どうかしらね？」

「ふざけないで紫。私はさつさと面倒な事を終わらせてゆつくりとお茶したいの。」

「ふふふ、そんなに怒らないでいいじゃない。靈夢はシンデレーヌ。」

「シンデレ? 何それ?」

「あら? 知らないの? 外では、大人気らしいわよ、シンデレが。」

「私が外の世界の言葉なんて知るわけないでしょ。それよりも、紫。さつさとこいつ等を外の世界に帰しなさい。」

「はいはい、わかつたわ。そこあなた、名前はなんと言いますの?」

「え、と。俺の名前は瀬尾 鬼人です。」

さつきの視線のせいで思わず敬語を使つてしまつ。先ほどまでの圧迫感はないものの、やはり少し気負わされてしまつ。

どうやら、俺は彼女の事が苦手意識があるらしくな。

「やつ。ならこっちの方のな「私の名前は、樋口 謙助と言います、お美しい貴婦人。」・・・そう。」

先ほどまで鬱状態は何処にいったのか、謙助は妙にキザつたらしく女性の前に跪いている。

アイツは、自分の格好についてどう思つているかは知らないが、全然似合つていなく、一言で表すと・・・キモい。

そう思つてゐるのは俺だけではなく、博麗と女性の方もらしい。微妙にアイツから距離をとつてゐることからして、どうやらドン引きしているようだ。

まあ、そりやそうだよな。いきなり、見知らぬ男が自分の前に跪いて妙にキザつたらしくすれば、誰でも引くわな。

「・・・ごほん。私の名前は八雲 紫。この幻想郷の管理人の最古の妖怪ですわ。どうやら、私の勘違いで此処に来てしまつたようだ。」

・・大変お詫び申し上げます。」

「いや、急に謝られても・・・」

「お気になさらずに貴婦人。むしろ、感謝しております。こんなに美しい貴婦人に出会えたのだから。」

まだのこのキャラを通すらしいな。どう見ても相手は引いているの・・・

つか、やつぱりハ雲さんは妖怪だつたんだな。で俺は妖怪と聞いてもつと、こう、エイリアンみたいな奴のイメージがあつたのだが・・・

・どう見ても、人間にしか見えないな。でもやはり、妖怪といったところか綺麗すぎてなんだか人ではないなとも納得してしまう。

何事も、行きすぎるとなんだか人外に見えてくるな。

「あの、俺たちは元の世界に戻れるんでしょうか?」

一番重要な事を聞く。もし、これで帰れないとかなつたら洒落にならんな。

「勿論です。すぐに帰れるよつこしましょ。」

と、ハ雲さんは扇を一振りすると、またわざのよつこに空間が歪んで割れ目ができた。

・・・一体どうやってるんだ?やつぱり、妖怪だからこんな事ができるんだらうな。

「この穴を通りていただけば無事元の世界に戻れますわ。」

と言つて、微笑むハ雲さん。それだけならば、俺は安心していただる。

だが、・・・

「あの～、なんか目見たいなのが穴の中からこっちを凝視しているんですけど・・・」

そう、ハ雲さんが作った穴の中には無数の目があるのだ。しかも、じつとこっちを見ている。

不気味を通り越して、これは怖い。何だか入つたら、もう戻れなくなりそうな雰囲気だ。

「大丈夫ですわ。この田は何もしませんわ。だから、安心して入つてください。」

「はあ。」

どこか胡散臭い笑みを浮かべるハ雲さん。正直、入りたくない気持ちが倍増した。

まじで、これ大丈夫なのか？

「本当に・・・大丈夫なんですね？」

「ええ。保証しますわ。」

「・・・・」

「鬼人。お前、こんな美しい紫が嘘をつくはずがないだろ？！？」

「・・・まじ、もうコイツウザい。」

つか、さり気なくハ雲さんの事を呼び捨てにしてやがる。しかも、下の名前で。

「わかりました。じゃあ、行くぞ諒助。」

「え？ なんで？ 僕は、此処に残つて紫と結婚するんだけど？」

コイツ・・・まじで言つてんの？

「おい、諒助。なんか、穴の中に裸の幼女がいるぞ。」

マジで!? 何処何処裸の幼女何処に居るの! ! ! ? ? ? ? ?

と、不気味な穴の中に首を突っ込む馬鹿。

俺は、諒助の穴から突き出でている尻に標準を合わせると、

思いつきり蹴飛ばした。なかなか似合つてゐるドップラー効果で間延びした叫び声を上げながら落ちていく諒助を確認すると、俺も穴に手を掛ける。一斉に目が俺を見てくる。・・・やつぱ、怖いわ。

「すみません。お世話になりました。」

私は非があるたので気はしら、真っ直ぐに進めば帰れますわ。」

な  
」

「別に? これは私の仕事だもの、気にしなくていいわ。てゆうか、さつさと行つたら? もう一人の方が待つてゐるんぢやない?」

一 おうじやあな

ハ雲さんと博麗にお礼を言うと、俺も諒助の後を追つて穴の虫へと飛び込んだ。

二人がスキマへと消えると自動的にスキマは閉じるので見届けると私は、マヨイガの家に帰ろうとスキマを開けた。

「じゃあね、靈夢。また何か合つたら呼んでね。」

そう言つて、私はスキマに入ろうとしたのだけれど、靈夢の声が私を止める。

「待ちなさい。・・・紫。あんた何か隠しているわね。」

・・・何事もなかつたように去りたかったけど、やつぱりこの子はそう簡単に帰してくれなさそうね。

「あら？ 私が何を隠していると言うのかしら？」

「惚けないで。さつきの外来人の一人の事よ。今まで貴方は外来人が来たら、中々帰そうとしなかったわ。散々、外来人で私たちをからかつたりして、最後には飽きて、如何にもいらないわ。みたいにスキマに強制的に落として帰していただじやない。でも、今回はからかうこともなくさつさと帰したじやない。おかしいとは思わない？」

「単に今日は気が乗らなくて、さつさと帰しただけかもよ？」

「ええ、そうね。あんたならそれもあり得る。でもね、あんたが外来人あんにも親切にしていた事が気に食わないのよ。わざわざ、

スキマに入つてからの道を教えてたじやない?しかも、不安がつて  
いる奴に対しても安心するように言つし。さらには、あんたを呼び  
捨てにしていたくせにあんたは何も言わなかつた。と言つより公認  
していた。でも、それはあんたの性格上、怪し過ぎるのよ。人間に  
呼び捨てにされるのを嫌つてゐるくせに。」

さすが靈夢、観察眼が素晴らしいわね。今の状況では素直に喜べな  
いけど。多分、すつとボケてもダメよね~。

「それも、気まぐれかもよ?」

「それはないわ。あんたと付き合つて長くなるけどあんなに親切な  
時は見たことないわ。私にもあんなに優しくしたことなんてないじ  
やない。」

やつぱり。とりあえず、からかつて話を逸らそうかしら。

「あら? 嫉妬してるの? 素晴らしいわねえ~。」

「誤魔化さないで。・・・多分、あんたはあの二人の事を知つてい  
るんじゃないの? それに、何での二人がこの世界に来れたのかが  
気になるわ。あんたは、多分あの二人が此処に来ている事を知らな  
かつたのでしよう? 幻想郷の管理人であるあんたに気付かれずに此  
処に来れる奴なんてそうそういない。だから、あんたは警戒して観  
察していた。・・・違う?」

駄目ね。・・・まったく、何でこの子はいつも勘が鋭いのかしら?  
時々嫌になるわ。

最も、全てが合つてゐるというわけではないけど・・・

「・・・そうね。確かに私はあの一人がどうやつて此処に来たかを  
知らないわ。少なくとも、彼らは幻想入りしたわけでもなかつたわ。

「

「ええ、私から見ても、あいつ等は能力を発現してはいなかつたわ。能力を持つていなかは分からなかつたけど。少なくとも、幻想入りするほどの能力をは見られなかつた。」

「でも、彼らは此処・・・幻想郷に来る事が出来た。・・・私にも、何で彼からが幻想郷に来れたかが分からないわ。」

そう、私にもそれは分からない。幻想入りする他にこの世界に来れる方法はスキマを通る事だけ。幻想入りではないとしたら、私のスキマを通つてくるしかないのでだけれど・・・私にはそんなスキマ開けた記憶がない。

でも、彼からは幻想郷に居た。正直、どうやつて来たのか見当もつかないわ。

「ふう～ん、妖怪の賢者つて言われてるあんたでも分からぬ事があるのね。」

「この子・・・明らかに私の事をバカにしているわね。ほんの少しいヤニヤしながら言つてくる所が、ちょっとムカつくわね。」

「それはそうよ。私にだつて、知らない事、分からぬ事はあるわ。ただ、その数が少ないだけよ。」

「そう。・・・で、あんたはあいつ等の事を知つてるの?」

「あらう～、これでこの話を終われると思つてたけど、やつぱりその事について聞いてくるのね。話したくないのよね～、その事については・・・」

「いいえ、私は彼らついてはまったく知らないわ。初対面よ。」

「だったら、何でみんなに親切だったのよ。初対面と言う割には、

やけに親切だつたじやない!

「あら？ 初対面の方には親切にするわよ。普通。」

「あなたはその普通じゃないから、話しこんじやない。れ、れ、せつ

一九四〇年五月二日

そう言って、靈夢は私に答えを促していく。・・・仕方ないわね。  
怪しまれるのは絶対だけど、ここはやつらと帰つましう。言いた  
くないし。

「それは、またの機会ね。じゃあ、私は帰るわね。」

そう、帰ろうとした矢先に、

いきなり、天井から何かが降つてきた。何処かの鬼が岩でも投げたのかしらね？でも、人間の声が聞こえだし、人間が降つてきたのかしら？

「あんた達は誰！？・・・・つて、えつ？」

もし、それが私たちの知らない人間だつたらまだ単純にすむ出来事だつたかもしれない。でも、そこにいた人間は・・・

「イタタ・・・大丈夫か？諒助。」

「あ、ああ。それより、鬼人。さつさと、俺の上から退け。」

さつきスキマで送つたはずの人間だつた。



### 第3話 帰れる手段（後書き）

さて、結局戻つてしまつた主人公たちでした（笑）  
この作品は結構・・・というよりほぼ作者のオリジナルな解釈  
出来ています。

なので、あれ？って思ったことなどは、感想でおつしゃつてください。  
なるべく、お答えします。

でも、話の内容に触れる質問はお答えできませんので、よろしくお  
願いします m(—)m

「か、鬼人・・・やつぱ戻らねえ？」

八雲さんに見送られて、あの穴の中に入つたはいいが、さつきから諒助が泣き事しか言わず、ビクビクとして進もうとしない。ゆえに、五分も経つたのに未だに出口に着けずにはいる。

ハ雲さんの前ではあれほど「大丈夫です!!!!」とか言ってた癖にして、いざ行くところのビビりである。凄く残念な奴だ。ともあれ、俺としてはさつさと帰りたい気持ちがあるので、少々強引な方法を探る事にした。

「おい、諒助。さつさと行かないと、お前のマジをスクランプにするぞ。」

「ハア!? もよこ おまこ それ洒落になつてねえぞ!!」

三たび前か  
洒落しなじからな

四庫全書

諒助とは一緒に寮に住んでいて鍵は俺が管理しているから、アイツを部屋にいれずにPCをスクラップにすることなんて簡単な事だ。それを、わかつているアイツは必死に走りだす。まったく、手のかかる奴だぜ。

「はあはあ、やつと・・・疲れたあ。」

「・・・お前、速すぎるだの・・・なんで、あんな速度出したんだ？」

いや お前が原因だからね！――お前が 僕の命と聞いても 述べじやないマネ パソをスクランブルすると とか いつからだからね！――

「……………」

—  
•  
•  
•  
—

あまりに気持ち悪かつたため、思わずドン引きだ。最早、ここまで来たらもう何も言えないな。

前からこんな奴だったためも  
まあ、むしろ言つても無駄そへた  
う半分は諦めてるがな。

「うへ、よひやへ見えて・・・あればなんだ?」

「どうしたんだ」東人「何が問題でも……え？」

初めはボンヤリとした光でしか見えなかつた出口が要約視認出来始めたのだが、何故かその出口の周りに薄い紫色の霧がかかつてゐるのだ。

「あれは……色的に毒？」

「に、しか見えないな・・・」

またもや、ここで問題発生である。どうやら、神様とやらは俺たちに嫌がらせをするのが趣味のようだな。

「・・・さて、状況を整理しよう。出口らしきものは此処だけだ。それに、八雲さんがここを通れば元の世界に帰れると言つていた。」

「ああ、  
確か

ああ、確かにその通りだ。紫の言ふ事には間違いはないからな。」  
「……末ごそそれを通すのかな……まあ、とりあえづ比呂を通る

他帰る方法はないな。だが、その出口に明らかに怪しさ全開の毒々しい色の霧が立ち込めている。これが、安全なものかどうかはわからないから、安全かどうかを確かめなければならない。そこで一人の内一人が先に通つて安全を確かめたら、もし仮に一人が死んでももう一人は生き残る。つまりは、一人が犠牲になつても一人は助かるわけだ。・・・な、諒助。」

「・・・おい、何故俺の肩に手を載せて、期待した目でこっちを見る！？俺は行かねえぞ！－！－！こんないかにも毒の霧です！みたいな所に行けるか！－！－！－！」

111

「何故、黙る！？」

「ついで、俺たちは出口に落ちていった。

「・・・以上が、俺たちがそのスキマとやらに入った後の行動だ。

「そう・・・つまり、あんた達のアホな漫才で私の居間のちやぶ台が犠牲になつたって事なのね。」

「・・・すみませでした。」

現在の状況の説明をしよう。出口に落ちた後、何故か博麗神社の上空に出されて、そのまま重力に従い落下。そして、丁度今の真上に出たらしく、屋根を突き破り、博麗とハ雲さんがいた今のちやぶ台の上に墜落。

博麗は、俺たちがちやぶ台を壊した事に激怒。スキマ（俺たちが、入つた穴の事。）に入つた後の行動を報告。俺達、土下座。まあ、ざつとこんなもんだ。

それどころの現状ではないのに、博麗の修羅の如きのよつた怒氣のオーラに逆らう事ができずに、今に至る。

「・・・まあ、いいわ。とりあえず、それは置いとくとして。紫、なんでこいつ等此処にいるのよ？外界に帰したんじゃないの？」

「どうやら、俺の聞きたい事は博麗が聞いてくれるらしい。

俺たちは、八雲さんの言つとおりに出口まで真っ直ぐに行つた。なので本当なら、今では元の世界に戻つている頃はずなのだが、現実、帰る事が出来ていない。

俺たちは此処に戻つてきているのか？これが、俺の疑問。博麗も同じ事を思つたらしい。と、言つ事はこれはわざとではなく、予想外だつた。つてことだ。

だったら、俺たちを送つた張本人である八雲さんは知つてるかもしれないと思つていたのだが、

「ええ・・・確かに、帰したわよ。ちゃんと、外界に続くスキマを作つたのに・・・」

「でも、こいつ等は戻つてないわよ。・・・まさか、あんた騙したんじやないでしょ？」

「いいえ、確かに帰したわよ。」これは、誓つてもいいわ。」

「そう・・・なら、なんでこいつ等は此処にいるのかしら？」

「正直、わからないわね。この事は、私も予想外よ・・・」

八雲さんも同じく、予想外の事だつたらしい。美しい顔のまゆげを寄せて、悩んでいる顔をしている。

ちなみに、超余談だが、その困つてている顔もまた美しく、美人はどんな顔でも美人なんだなと思つた。

・・・なんか、この思考、諒助みたいだな・・・なんか、ショックだ・・・

・・・そんなくだらない事で落ち込んでる場合じやないな。俺は、八雲さんに向き合い、声を掛ける。

「八雲さん、俺たちは・・・どうなるんですか？」

俺たちはどうなるか？それは、元の世界に帰れるのか、帰れない場合はどうなるのか？という意味の問い合わせだ。

「こり辺は、キッチリととかないといけない。帰れる場合は、何も問題はない。だが、帰れないとなると……俺たちは、どうなる？こんな、身寄りもなく、知り合いもない世界で、高校生二人が生きていけるはずがない。

「大丈夫ですわ。貴方達は、私は責任をもつて、元の世界に帰します。」

「そうですか……」

良かつた……最悪なケースは、ないらしい。少し安心した。しかし、八雲さんの言葉はそこでは、終わらなかつた。

「ただ……」

「ただ？」

「今回の事は、私としても予想外の事だったので、原因を突き止めることに少し時間が掛かると思います。」

「どのくらい掛かりますか？」

「……今では、何とも言えません。ただ、私も全力で調査しますから、大体一ヶ月がたつまでは、終わると思います。最低、一週間は掛かるでしょう。」

直ぐには、帰れないと来たか……俺としても、八雲さん達にとつてイレギュラーの事だったから、直ぐには帰れないとは思っていたけれど……最短で一週間か……思ったより、長いな。

だが、こちらとしては戻る手段が八雲さんのスキマ以外に方法はないので、選択権なんてない。此処で、暮らす他の選択はないのだ。

「わかりました。しかし、俺たちは何処で生活すればいいんですか

？」

問題としては、何処でその期間を生きるかといつ事。ここには、俺たちの知り合いなどいるはずもなく、衣食住を当てにするといふなどない。

ゆえに、野宿するしかないかなあ～と思つていたら、八雲さんがビックリ発言をした。

「それは、此処、博麗神社にお泊りになつて下さい。」

「此処にですか？」

「はい。此処は、比較的に他の所より安全な場所ですし、なにより靈夢がいますから。」

「はあ！？ちょっと、紫！？それ、どういう事！？」

「どう言う事つて・・・仕方がないじゃない。此処ぐらいしか、泊まる場所がないじゃない。」

「あんたのどこでもいいじゃない！？元々、あんたが帰せないのが悪いんだからそっちは泊めなさいよ！？」

「貴方は、博麗の巫女でしょう？外来人を、案内する役目は貴方のはずでしょ？だつたら、此処に泊めた方がいいじゃない。」

「いやよ！泊めるのだつて、ただじゃないのよ！？」

まあ、確かに。男、しかも、よりによつて高校生という一番食べる年ごろの奴が一人も居たら、食費などもバカにならないだろう。これは、長引きそうかなあ～と思つていたら、

「そこは、この人たちにその分働いてもらえばいいでしょ？男手が一人も増えれば、貴方だつて働かなくてもいいかもよ？」

「それならいいわね。」

「はやつ！？」

あつさりと、承諾してしまった。思わず、声が出てしまうほど決断が早かった。・・・

「どうして、おまえの事で心配しているのですか？」

良いも何も、こちらとしては衣食住の場所を提供してもらえるだけでも嬉しいので、承諾しようと返事をしようとした。

「・・・なんか、こいつだけ泊めたくないわね・・・生理的に。」

ドン引きする一人の女性。まあ、気持ちはわかる。こんな変態は誰でも泊めたくないだろう。

勢いで外に飛び出していく馬鹿。  
じゅうかんなんとも言えない空気が場を支配する。

A 3x3 grid of nine dots arranged in three rows and three columns. L-shaped brackets are placed at the top-left, top-right, and bottom-right corners of the grid, enclosing the top row and the bottom-right dot.

誰も何も言わない。無言が居間を支配する。

さつきまでのシリアスな雰囲気が台無しだった。とりあえず、俺か

ら口火をきる。

「ま、まあ、これからよろしく博麗。」

ええ、よろしく悪人。

そして、俺たちの幻想郷の生活が始まった。

side  
? ? ?

順調だ。此処までは、思い通りになつたよ。

まったく、普通は別世界とかに来たら探検しようとかおもうはずなんだけどねえ。いきなり帰ろうとするのは予想外だったよ。

出来事があつても元の路線に戻すのが一流の脚本家つてもんだよ。うん。

さて、これからどうなるかな？哀れな操り人形の劇は？

↖↖ · · ↗↗

! . ! . ! . ! . ! . ! .



## 第4話 居候（後書き）

ひつむじぶりの更新です。

誠に申し訳ありませんでした m(—) m

今回の話は、なんか考えるのが難しく、めつちやくちや 手間取つて書きました。

ゆえに、なんかこう辻褄が合わなかつたり、変に感じるところがあるかもしれません。

そういうところは、指摘して下下さい、お願ひします。すぐに、修正にかかりので。

余談ですが、とうとう東方Project第13弾 東方神靈廟の発売が来ましたね^\_^ 非常に楽しみです！！今回の自機が、靈夢、魔理沙、早苗、そして・・・みょん！！

まさかです。非常に驚きました。はい。

東方永夜抄以降ですかね、みょんの自機は、永夜抄では、かなり使い勝手が良いキャラだつたんで、結構使ってました。

個人的には、白蓮に自機になつて欲しかつたなあ・・・

それと、今回のあらすじが靈がワラワラと出るとかだから、魅魔様出ないかな～なんて思つけど、やっぱ田作キャラはいつも通りでないですよね。

何にせよ、楽しみです！！！！

もう、体験版はやりますー！

## 第5話 博麗神社の朝食（前書き）

またもや、のんびりとした更新。  
誠に申し訳ない m(—) m

## 第5話 博麗神社の朝食

ちゅんちゅんちゅん。

鳥のさえずりが聞こえる。

ぬるま湯のよひに温かなまどろみの中でもうくじと意識が覚醒していへを感じた。

「ふああああああ・・・」

俺は大きく欠伸をすると、むりくりと起き上がる。

畳の上で寝ていたので、カチコチに固まつた体をほぐすよひに大きく伸びをする。

「・・・寝みい。」

開かれた窓から温かい日差しの上と、心地よい風が舞い込んでくる。布団の中の体にほんのりとした温かさがしみ込む。

二度寝したら、気持ち良いだらうなあ〜と思しながらも、俺は布団の中へ這い出る。

この調子で、一度寝を決め込むと必ずと黙つていいほど爆睡する。

誰もが経験があるだらう。学生ならば、尚更だ。

このまま欲望に負けて寝てしまつと、必ずと言つていいほど寝過してしまう。俺も何度もこのよひな状況に陥り、学校に遅刻したことがある。

そういうわけで、起きよひとするのだが、……

「つみゅ〜…あいたん〜…行つちややダよ〜…ぐ〜。」

何故か、俺の手を掴んで離さない諒助のせいで起きよひにも起きた

ない状況にある。

引つ張つて手を抜こうとするけれど、無駄に力強く握られているために抜くことができない。

「おい、起きろ諒助。もう朝だぞ。… おい、起きろってば。」

軽く揺すつて声を掛けながら起こうとするが、一向に起きてはくれない。むしろ、手を握る力が強くなつていつている気がする。

「ああ～、あいたんのほつペ氣持い～…スリスリ」

キモツ！－「イツ、俺の手を頬に当てながら頬ずりしてきやがった－！－あまりにも気持ち悪すぎるのでは必死になつて抜こうとするのだが、やはり抜く事が出来ない。

「つちー！仕方ねえ……ちょっと荒っぽく起こすか。」

あまり使いたくなかったが、俺としては一刻も早く手を抜きたいので最終手段を使う事にする。これ以上こんな気色悪い事をされないと、諒助症候群にかかるからな。

げを掴むと一気に引っ張るーー

ふう、やつと手を離しやがつたか。  
つて、うわ～。よほど強い力だつたのか、諒助の手形が付いてるよ。..

「最悪だな、お前。」

「えつ！？何故？」

「何、俺何もしてませんよみたいな顔しちゃってんの！？お前だよね！？俺のもみあげ引っ張ったの！？そつきから、マイもみあげがマージンシー発してるんだべー。」

あ～、面倒くせえ～。だから、使いたくなかったよなあ～、これ。使うと十割の確率で五月蠅くなるから。

「は？ 何言つてんだよ、諒助。俺がそんな」とするはずがないだろ

「いや、お前のその右手に結構な数の毛が握られてるんだよねーー！」

「…汚ねえな。猫の毛か？」

卷之三

「むつか、嫌そうな顔をすんじゃねえよ………」か、やつぱり

「さて、やつやつと探団をなおすか。

卷之二十一

とか思いながら、自分の布団をたたみ押入れの中におす。

「おひ、お前をさつさと布団をなおせ。今日から俺たちは飯を作んなきやならないんだぞ、そんなに騒いでる暇なんかなんだよ。わかつてんの?」

「いや、原因はお前だからね！……？？」  
「はいはい、ワロスワロス。」

そんなやり取りをしながら、ちやつかりと布団をキッチンとなおして  
いく謹助。なんだかんだ言いながら、『イシせやるべれ事せやる奴  
だ。

「ほい、完了。」

「じゃあ行くがー

そばにしながら、向かへて坐所

男とあまに無縫な所なし、備道はは料理の超喰なげて欠片もない  
なら、何故向かつているのかというと…

「今日から、朝晩、全ての食事を作んなきゃならなこと思つと氣が重くなつてくるな……」

俺たちが今日から朝晩と全ての食事を作らなければいけなくなつたからだ。

「仕方ないだろ?此処に泊まらせてもらう条件なんだからよ。」

はらはらの如き道に仕事探し作にでるに、なれど

否定の言葉が見つからない。思わず、遠い田をして思い出すは

は、  
昨日の晩の事。  
俺達が此処に滞在する際の条件が博麗のやつから提示された。それ

？全ての家事は俺達がやる事。  
？博麗神社の仕事を手伝う事。

?暇さえあれば、人里に下りて金を稼いでくる事。

の三つである。どれも、本来は博麗がするべきことだ……いや、最後の以外か。

まあ、ともかくそれを俺たちがやる事になつたのだが、明らかにほぼ全ての仕事を俺たちに押し付けていると思える。

泊まらせてもらう身なので、家事くらいはともかく、神社の仕事。そして、暇な時は金稼ぎ。これでは、まさに奴隸だ。

一応反論はしたのだが…

以下回想

「さすがに、仕事が多すぎるんじゃないのか? 博麗。」

「そう? 此処に泊まるのならこれぐらいしてもらわないと割に合わないわね。」

「だが、これでは俺たちが全て此処の仕事をする事になつてしまつているのだが…」

「いやなら、いいのよ? でもね、外は妖怪が一杯よ? ここじゃあ、あんた達の知り合いなんていないから、野宿するしかないけど。それだと、あんた達普通の人間だから、すぐに他の妖怪に食べられてまうかもねえ~。まあ、此処に居れば安全だけ?」

「……」

「ここで働いて安全に過ごすのと、外に野宿して妖怪にペロッと食べられちゃうの、どっちがいい?」

回想終了

あつたりと返されて、条件を飲み、そのまま今日を迎えた。

なんだか、すぐ納得がいかなかつたが、命に代えられぬという事で条件通り、家事の一環として食事を作るために台所へと向かつているのだ。

正直、料理とか特別に得意とかではない。一般常識程度のものが作れる程度だ。それに、家事とかもあまりした事などない。

母親の手伝いとかの程度のものは出来るのだが、本格的なものなどはまったくわからない。

つまり、とても苦労しそうだと言つ事だ。

「つと、着いたな。じゃあ、さつやと朝飯を作るか。」

「おう！！！」

「諒助は、ご飯を炊いてくれ。俺は、味噌汁を作るとしよう。」

「わかつたぜ！！！」

とりあえず、朝飯の王道として、ご飯と味噌汁。そして、焼き魚を作る事にする。無駄にカツコつけて失敗したら元も子もないからな。材料や道具に関しては、昨日博麗から一通りの説明を受けていたので困る事なく用意はできている。

「さて、やりますか。」

\*\*\*\*\*

数十分後、今の机の上には立派な朝食が並んでいた。

メニューは、味噌汁、白飯、焼き魚、そして卵焼きだ。

味噌汁が意外と時間が掛からずに作れてしまったので、おかずを一品増やしてみた。

「おお～、立派な朝食になつてる……俺つてスゲーな……」

「いや、お前が作ったのは白飯だけだからな……」

「十分じゃない？俺にしては？」

「…確かに。」

諒助も無事に白飯を炊けていた。「コイツは、一人暮らし癖にして自炊が出来ず、前に飯を作らせた時はおかずは愚か、白飯だつて炊く事が出来ていなかつた。

さすがにまずいと感じた俺は、わざわざ一通りの料理を母から学んでコイツの教えたのだが、結局は出来ることになつたのが白飯を炊く事。それ以外はからつきし駄目のままだつた。

しかも、その白飯も成功率が約六割と微妙なラインなので、コイツは白飯を無事に炊けただけでも十分な事なのだ。

「あら、ちゃんと作れてるのね。朝食。」

丁度良いタイミングで居間の襖が開けられて、昨日と同じ巫女服と大きなリボンの髪留めを付けて博麗が入つてきた。

「お早う、博麗。」

「おつはよつ、靈夢！……」

「お早う、二人とも。しつかりと条件は守つていいみたいね。」

「ああ、言いつけ通り家事をやつてるぜ。」

そう言いながら、俺達三人は座り、目の前の料理に目を向ける。

「温かい内に早く食つてしまつたか。」

「同感だ……めちゃくちゃ腹が減つたでヤンス。」

「そうね、それじゃあ、」

「「「」」」

自分で言つのもなんだが、結構つまい感じで作ることが出来たと思うので、味が楽しみだ。

箸を伸ばし、焼き魚の身をほぐして、白飯と一緒に口へと放り込む。

「普通にうまいな…」

口では、母が毎日作つてくれた朝食となら変わりない味が広がっている。初めて本格的に作つたにしては、想像以上に良く出来ていると思つ。

そう考えていたのは、他の一人も同じらしく、

「つまおおおお！？めつさうまい……！」

「……予想外ね。おしいわ。」

二人とも、驚いた風にしてうまいと言つていた。  
作つた身としては、嬉しい限りだ。

「これは、どつちが作つたの？」

「白飯を炊いたのが諒助。他は全部俺だ。」

「意外ね……てつきり、作つた事がなさそうだったからお茶漬けでも出でくるかと思つてたわ。」

すごい意外そうな顔をして、此方を見てくる博麗。

少しその発言になんだかイラッとしたが、作った本人が驚いてるん

だから、仕方がないだろう。

「前に、母から料理を習つた」とがつたからな。それで、うまく作れたんだ。」「

「そう。これなら、料理は任せても大丈夫そうね。」

どうやら、満足してもらえた見たいだ。  
と勢いよく飯を食らつてゐる。

俺もさつさと飯を終わりそうと思い、食べることに集中した。

「ふう〜、満足したあ〜。」

「私もね。暫らくぶりね。こんなにちやんとした料理を食べたのは。  
おいしかったわよ。」

「そりや、良かつた。てか、諒助。お前は満足してないで後片付け

手伝え。

「」

家の家事の一環として、片付けもしないといけないので博麗みたいに「口<sup>トコ</sup>口<sup>トコ</sup>としたいのだが、それを思い止めながらちやつちやつと皿を台所の流し台へと運んで行く。

そんな俺を置いといて寝転がっている諒助を一蹴りして、手伝いを促す。

「俺が洗うから、お前は拭く役目な。」

「OK!!」

「……割るなよ?」

「大丈夫だつて!!俺を信じろよ、魔人!!!!」

諒助に一抹の不安を感じながら、ちやくちやくと皿を洗っていく。それを危なっかしい手つきで諒助はタオルで拭いていく。そんな流れ作業も無事に皿を一枚も割ることなく終えて、居間へと足を運んだ。

「後片付け終わつたぞ。」

「御苦労さま。」

居間では、博麗が完全にだらけており、寝転がつたまませんべいを齧っていた。

こちとら、コイツのために働いているというのにこの態度に少々……いや、かなりイラッと来たが、まあ、泊めてもらつている身なので、文句なんぞ言えるはずもなく居間に腰掛ける。

「それで、この後どうすればいいんだ?」

家事が神社の仕事やらをしなきゃならないといけないのだが、その内容が分かるはずもないの、指示を博麗に仰ぐ。

「そうね……今日は、人里に行つて働く場所を見つけてきなさい。」

「え?」

「暇な時に出来て、お給金が良い所が好ましいわね。」

「いやいや、早速働く場所を決めるのか！？」

「ええ、そうよ。幸いに今日はこれといった仕事もないしね。丁度いい機会だから行ってきなさい。」

まじかよ…

## 第5話 博麗神社の朝食（後書き）

全然、ストーリーが進めてねえ……。おれは  
こんな調子で完結とかいけるのかな？不安になつてきましたよ……

今回の話は、日常。大半が諒助との絡み。……じつじつといつなり  
た……

### 余談

小説を書くためと思い、今東方シリーズを一からホームページでやつて  
いるが……

何回やつても、何回やつても、ホームページがクリアできないよおおお  
おおーーーー（泣）

ずいぶんと腕が落ちてしまったようだ。紅魔郷とかパチエで一機落  
ちとかしていまい、あっけなくP.A.（）にピチュられ、なんとか  
おぜう様に辿りつくも残機0となりゲームオーバー……  
ちょっと、泣き声になつたのは此処だけの秘密。

後、今やつてるゲーム「恋と選挙とチョコレート」の星月がかわ  
ゆすぎて萌死んだ。

## 第6話 邂逅（前書き）

ふう…まるで一ヶ月ぶりの投稿だ…

ちょっと、AVAっていうFPSにハマつてたら、何時間にか用田は流れていたんです…

## 第6話 邂逅

「はあ、はあ、……い、一体この階段何段あるんだよ……？」「か、軽く百段は越えてるな……」

息を切らしながら下りているのは、人里へと続く階段だ。仕事を探して来いと言われた俺たちは、この糞長い階段を必死こいで下りている。

博麗神社から見て地面が見えなかつたから恐らく長いであろうと予想をしていたが、ここまで長いとは思いもしなかつた。

始めはちよつとした遊びという事で階段の数を数えてもいたが、八十段辺りから体力の低下と共にやる気も低下。

今では、そんな余裕などあるはずもなくただひたすらに階段を下りているだけある。

「つたく、何でこんな長い階段を作つたんだよ……明らかに不便だろ。」

「確かに、参拝客が神社の癖に来てないなあ」と思つていいだが：「こりや、来ないわな。」

「だな。下りだけでもこんなにきつこいに上つとかになつたら……死ねる。」

「俺なら、靈夢のためなら行けるけどなーー。」

「はいはい。」

「……なんか反応冷たくない？」

「そんな事ねえよ（ここで絡むとまた面倒になるからだよ）。つと、ようやく見えてきたな。」

神社を出て階段を下り始めてはや一十分が経とじてこの時に、ようやく地面が見えた。

「ここまで時間を掛けて下りたことから、如何にこの階段が長いのかを思わせる。

「やつとかよ…どんだけこの階段長いんだか。」

「相当長いだろ？…まあ、後少しなんだ。へばるなよ諒助？」

「へーい。」

到達地点が見えた事があり、心なしか軽くなつた足を動かす。

「しつかし、またド田舎な所だよなあ～。周りが木で覆い尽くされてるぜ。」

「それだけ、文明が発達してないって事だろ。道らしき道も見えないからな。」

見えてきた地面もとてもじゃないが、舗装されているとはほど遠く、ただ単に草木が生えていない通るだけの場所。つてな感じだ。

「…本当に、この世界は俺たちの居た世界とは違うんだな…」

「…ああ、そうだな…なんだ？まだ信じてなかつたのか？」

「まあね。そりや、いきなり別世界ですよ。つて言われても、普通は信じられるか？」

「だよな…起きてる事はあり得ない事ばかりだし。」

諒助との会話をきかつけに昨日の事を振り返ると、まるでフィクションのように感じる。

田を覚ましたら、知らない場所に連れられていた。空間を割つて移動するという奇天烈な事象。

あり得ない事ばかりだ。きっと、俺達以外の人が代わりに来たとしてもあまり俺達の反応と変わらない反応をするだろう。

昔の話だが、かの有名なガリレオは、当時の一般常識を覆す地動説

を説いただけで、周りからは徹底的に批判され、挙句の果てには異端審問で軟禁状態にまでさせられたといつ。

要するには、人は異質、異常を認めようとしないのだ。例え、それが表れたとしても、それを排除しようとする。中世末期から近代にかけて見られた魔女狩りが良い例だ。

俺たちは普通の人間だ。しかも、まだ社会人にもなっていない高校一年生。諒助が戸惑っているのは無理もない。

「まつ、元の世界には帰れるつてんだ。あんま気にすんなよ。そんな考へてるなんてお前らしくねえぞ？」

「…おう。サンキュー、悪人。」

「良いってことよ。で、着いたぜ。」

「やつとか…」

長かつた階段の最後の一級を降り切り、一息をつく。

「ああー、やつと着いたあー。」

「ふう…真剣で長かつたな。」

今まで下りてきた階段を見上げる。

「何のためにこんな風に長くしたんだか…」

「まあ、いいじゃん。下り終わつたんだし。」

「諒助…帰りはここを上らないといけないんだぞ？」

「…言わないで欲しかったよ…何で現実つてこんなにも厳しいんだろ？田から汗が出てきたぜ…」

背後に”ず～ん”と付きそうな暗い雰囲気で座り込む諒助。まったく、こんな調子だと人里に着くまでに口が暮れるぞ。

「はう、んな落ち込んでる元氣があつたひでわと行くぞ。」

「いや、元気がないから落ち込んでるだけだ」

11

[REDACTED]

「ホーリー！ ！ ？ ？」

\* \* \* \* \*

「……」こは……何処だ?  
「……森だねえ」。

諒助に揚げ足をとられるという痴態は曝してから早一時間。俺たちは絶賛の迷子になっていた。

「つたく、博麗の奴。階段を下りてまっすぐ行けば、人里に行ける  
んじゃなかつたのかよ…」

そう、博麗が言つたとおりに階段を下りた後、俺たちはひたすらにまっすぐに進んできた。明らかに未開の樹林だったのだが、どちらにせよ周りは森。となれば、博麗の行っていた通りにまっすぐ行つてみようと言つ事になつたのだ。

だが、結果はこれ。迷子という名のオチだつた。

「いかん…本当にどうちに行けばいいのかがわからん。」

「うーん、来た道を戻るうにもわかんなしなあ。」

振り返つても、見えるのは変わらずの木、木、木。俺たちが進んできたという軌跡はまったくない。つまり、確実に戻れるという保証はなく、さらに迷う可能性がある。

「こんなことなら、なんか田印でも付けておくんだったが。」

「だな。とりあえず、進むか?」

「そうだな、現状博麗の言つた事が本当だと信じてまっすぐ進むしかないな。」

「おう。…でか。なんか怖くない?」

「お前…ビビりすぎだろ…」

確かに周りは木…といつより竹か?しかなく日の光さえ竹の葉に遮られ、昼間の癖にして薄暗い。だが、しかし仮にも高校一年生の癖にしてこの程度で怖いはないだろ。

「いや、ほら、この世界つて妖怪とか居るんだろ?なんか出そうな雰囲気じゃない?」

「…否定はできんな。」

「だろ?」

「うーん、この世界つて妖怪の住んでる世界だつたっけ…すっかりその事が頭から抜け落ちてた。」

これで諒助のあまりなビビリ様が納得できた。

「でも、ホントにいんのか?妖怪なんて。」

「靈夢と紫は居るって言つてたじやん?しかも、紫のあの奇天烈な

能力が紫を人間じやないって言つてるもんだぜ？」

「それはそうだが…ほら、妖怪つてもつとこつ化け物みたいなイメージがあるんだよ。ハ雲さんは、何処からどう見ても人間の容姿じゃないか。能力は置いといて。」

「まあ、確かに。」

「それを、どうしても妖怪だと思えなくてな。しかも、未だにハ雲さん以外の妖怪なんて見てないだろ？だから、ホントは妖怪じやなくて突然変異体ミコトコトントみたなものじゃないかなと思ってるんだ。」

「突然変異体か…ま、どっちにしろ人外つてこつた。」

「あくまで俺の予想だけどな…」

妖怪とは何か？何をもつて妖怪と定義づけるのか？それは、分からぬ。あくまで元の世界の知識をベースに考えたものだ。しかし、それはこの世界で通用するものか？この世界での常識は俺たちの常識に当てはまるのか？

考えだしたらキリがない。そもそもここが別世界だつてことさえ怪しいのだ。確かに俺たちはハ雲さんの人外能力を見て、体験した。しかし、それは何かの仕掛けによつて惑わされたものではないか？博麗やハ雲さんが俺たちを騙しているという可能性も捨てきれない。つまりは、俺は本当の意味でこの世界で起きた事を未だに信じていないのだ。博麗やハ雲さんの事でさえ。表面上は信じているフリをしているが、心の奥底では疑つてゐる。それが、俺という人間。やつぱ、俺つて奴は最低なんだろうな。

「どうしたんだ、鬼人？なんかめつちや思いつめたような顔して。」

「…いや、なんでもねえよ。ほら、さつさと行くぞ。」

「あつ、おい、置いてくなあーーーー怖いんだよーーー！」

幾ら疑つたとしても、現状それを確かめる術はない。何にせよ、今の俺達にできることは、ハ雲さんが俺たちが元の世界に帰れる方法

を探し当ってくれる事を祈つてそれまで生き残る事だ。

「つたぐ、面倒くせえ」とこなつたぜ。ほり、諒助。何突つ立つて  
るんだよ。わざと行くわ。」

何故か立ち止つている諒助。何してんだ？

「なあ、魔人。何か聞こえない？人の声が。」

「ああ？こんな所に人がいると思うか？まあ、俺達の事は除いてよ。」

「いや、でもこれは子供も声だぜ？耳を澄ましてみろつて。」

「…分かつたよ。」

諒助に言われたとおりに耳を澄ましてみる。どうせなんかの音の聞  
き間違いだと思うが…

「…………え…………」

！？

「子供の声だ…」

「だろ？声にあどけなさが残つてるから、多分幼稚園生(べうせい)の年  
だぜ。」

「ああ…チツ…遠すきで何言つてるのかがわからんねえ。行くぞ諒  
助！」

「おつ…！幼女のピンチだ…みなぎつてきたああああああああ  
ああああああああ…！…！」

俺たちは、声が聞こえる方へと走り出した。

「……けてえ……」

「…………すけてえ」

「…たすけてえ～！～！」

徐々に大きくなつてくる声は、俺たちが声の主に近づいている事を知させてくれていたが、その一方で明らかに大変な事に巻き込まれている事を如実にしていた。

「はあはあ、そろそろ見えても良いくらいの近さまだ来たとも思う

「こっちだ、鬼人！俺のセンサーがこっちだと言っている！！！」

「まあな！！ほら、急ぐぞ、魔人！！」

いつもの通りに諒助が並々ならぬ能力を發揮して、猛ダッシュで駆

けていく。

アソシ… 色んな意味で妖怪っぽいな。

「そろそろ近いぞ……」

「分かつた！！」

「いつこう時の諒助の判断は確実だ。そろそろ見えてくるだろ？」

「たすけてえ～！！！！！」

「いた……」

諒助が指を指したところを見ると、一人の子供が走っていた。年齢的に、大体4、5歳つてところだろう。その子は泣きながら、必死に走っていた。見た所、何かに追われているようだが……

「一体、何から逃げてるんだ？」

「そんなことはどうでもいい！！今、行くぞ…………」

「あ～、この馬鹿！！！」

何の躊躇いもなく飛び出していく諒助。アイツ、状況も読まずに……危険だぞ！？

「こっちだ！！こっちに来い！！！」

「…………？？助けてえ～！！」

此方に気がついた子供が一目散に此方にやって来る。

「怖かつたよお～。」

「よしよし、もう大丈夫だよ。お兄さん達がいるからね？」

「う、うん……グスツ、グスツ。」

諒助にしがみ付きたながら諒助の胸に顔を埋める子供  
諒助の奴、顔が気持ち悪いぞビヤケてやがる…キメハ

「で、どうしたの？何があったの？」

「あ、あそんでらね、みんなとはなれつてやつて、そ、そしたら、  
よ、ようかいが…」

「妖怪？」

「う、うん。ようかいがわたしをおいかけてきて、上げてたの…グ  
スッ、こわかったよ~」

「よしよしよし、怖かったね。でも、もう大丈夫だよ、お兄さん達  
が助けてあげるから。」

「う、うん。」

妖怪だと…ホントに困たのか…  
まずいな…この様子だと早く逃げた方が良さそうだ。

「おい、諒助。この子を背負え。ここから早く、逃げるわ。」

「了解。ねえ、君。名前はなんていうんだい？」

「み、みさわき あかねだよ。」

「そう、可愛い名前だね、あかねちゃん。それじゃあ、あかねちゃん、僕の背中に乗ってくれる？。」

「わかった、お兄ちゃん。」

「お、お兄ちゃん…」

「おひ、この馬鹿トリップしてた暇なんかねえよ。ほひ、行くぞー。」

「…」

「分か」おお~、こんなところいたのか~、探したやお~「なつ  
！」

いきなり聞こえた声。追いつかれたか…！

そう思い振り返ると…

「チツ！…遅かつ…」、「これは…」

「うん？人間が増えてる？ぐはははは、今日の俺様はついてるのぉ  
～！」

豊かな髪の毛。ぼうぼうのあごひげをはやした大きな頭。ふくらん  
だ腹と強靭な肉体。肌は暗緑色の一色であり、身長は軽く一メート  
ルは超すだろう。

そこには、妖怪が居た。

俺の頭が、生き物としての警告を鳴らす。逃げろ！…と。

「つぐ！…諒助、その子を連れて早く逃げろ…！」

ここで三人一緒に逃げるには危険だ。障害物は竹のみ。この妖怪に  
は何の障害にもならないだろう。だとしたら、俺が足止めをして、  
この二人を逃がした方が命が救える可能性は高い。

「鬼人、お前は！？」

「後から、追う！…早く行け！…！」

「ツ！…分かった！…」

ダツダツダツダツダツ

さすが、諒助だな。長年親友をやつていただけ俺の考えが分かって  
るぜ…

「さて、悪いがアイツラは逃がさせてもらひづぜ。妖怪さんよ。」

「ふん、たかが人間一匹に何が出来る？それに、見た所、靈力も神力もない。ただの人間じやないか。ほれ、足も震えておる。」

そりや、そうだ。相手は、優に俺の二倍近くの大きさだ。しかも、筋肉ムキムキ。殴られてたら一発だろうな。相対する”死”。怖いなんてもんじやない。早く、ここから逃げ出したい。

「でもよ……俺は……もう一度と……大切な奴を失うわけにはいかない」「死ねいい。」「ガツ——！——！」

妖怪が無造作に振るつた腕が俺を吹き飛ばす。まるで車がぶつかつた様な衝撃が俺を貫き、まるでボールのように吹っ飛んだ。

「ガハッ！！！」

口から大量に血が出る。あの野郎…セリフぐらい言わせろよな。既に咄嗟に庇つた右手の感覚がない。さっき、口から血を吐いたから、恐らく内臓のどつかがやられてるんだろうなあ。

「ふん、話が長いんじやあよ。お主みたいな奴を喰つても美味くはないじやう。やっぱり、人間の肉は幼子の柔肉が一番美味しい。」

そう言うと妖怪は走っている諒助達に手を向ける。

「へへへへへ、幾ら逃げよつとわしかりは逃げりぬよ。」

妖怪の手に黒い光が灯りだす。

「死ね。」

……

直観だつた。

……めろ

あの光は後一瞬で完成し、諒助達に向かうだろ。そうすれば、容赦なく諒助達は死ぬ。そう思った。

やめろ

体を動かそうとも既に俺の体は動かない。既に肉体は死んでいるんだろ。

やめろ

俺に出来た事は、それは……

唯叫ぶ事だけだった。

その瞬間、何故だか妖怪の動きが止まつた。

「な……に? 動けぬ?」

妖怪自信にとつてもそれは予想外の事だつたらしく、顔に戸惑いが表れている。

十分な時間だつた。

「くへ……わたくし……おや……が……れ……」

妖怪の方を見ると驚愕した顔で俺の方を見ている。

## 間抜け面だな

—?—

うん？誰かが何かを言つてゐる。だが、小さすぎて聞こえない。

「…………夫か！？」

何故だか視界が真っ赤に染まる。既にボヤけている俺の視界には、それはとても美しい鳥の形に見えた。そう、まるで不死鳥。フエニックス俺を助けるように現れたそれは、妖怪に突っ込むと一瞬で妖怪を燃やしていた。

「き……れい……だ。」

そこで俺の意識は途切れた。

## 第6話 邂逅（後書き）

初めての戦闘シーン！！

主人公糞弱ッ！！台詞すらまともに言えないなんて…なんて軟弱なんでしょうか…

てか、大抵ああいつ台詞言いつ奴ってやられますよね（笑）主人公だけどwww

そして、急いで書いたためずじく変な感じがビンビンです…  
間違ってるところや変なところ、表現が違うところなどあつたらバシバシ言つて下さい…！ よろしくお願ひします…！ m(—)m

余談

やつと、紅魔郷ノーマルクリア出来たお…！

## 第7話 人里の守護者（前書き）

にじファンよ！！私は帰ってきた！！

と、どじぞのMSの人のセリフを言ってみたのですが、約二ヶ月ぶりの更新でした。本当に申し訳ありません・・・

これから段々と落ち着いてきたので、更新は一ヶ月に一回のカメ更新になると思います。

てか、余程の事がない限りに一ヶ月に一回更新するので、これからもなにとぞよろしくお願ひします。

\* 何故か削除してしまっていたので、もう一度投稿しておきます。  
・ 何故消したし・・・

## 第7話 人里の守護者

「うぐく、う、うう」

「おひ、せやくはなせよ……おれたちが、みつけたんだぜ？それは、おれたちのむんだぞ……」

「アハだ、アハだ……おれたちのおもひやをとるなよ……」

「う、うのはおもひやじやなんかじやない……うのうをこじめるなよ……」

「ここからせなせよ……うのう……」

「せ、せつたひはなすもんか……」

「うひ、みんなやつれまゆうせー。せなせないこひがわるいんだからあ。」

「おひ、せなせよ……」

「カッ

「キ

「コ

\*\*\*\*\*

卷之三

「はあ、はあ、しんでもはなすもんか。」

「やめなさい。やれいじよハナタク。」  
おじいちゃんが叫ぶ。

「あつたぐ。だれが、ぼうつょくおんなんよ。わたしが、ぼうつょく  
せふるつてないわよ。」

「みやせん」

たでN<sub>0</sub>(:」二〇二一年一月一

卷之三

「つたぐ、あんたもこりないわね。あんたはよわいくせに、けんかなんてするんじゃないわよ。またぼくぼくにされているじゃない。」

へこにけんかしてたわけじゃなしよ。。。

「まさか……あなたまた、よけいな」といふびをつゝにんだの？」

「だ、だつてー！」のがいじめられてたから・・・」

「はあー、あんたはまた、むだにせこぎかんをはつあしりゅつたわ  
けね。ま、それでこそあんたらしいんだけじ。」

「せいきかんてなに?」

「……なんでもないわよ。それより、そのこまごまじみうがなの？」

「そ、うだつた！・・・・・　だいじようぶ？　あつ・・・」

・・・だけあせつたわね、あのう。

うん、でも、けんきたたからそれでいいんだ。

- 100 -

みせやん たすけてくれてありかどね

「べつに、きにしなくともいいわよ。いつものことじゃない。……あ、でも、あんた、このあとそういうつだいなセコよ？」

「うん、わかつたよ、みつちやん。」

「ならいいわ。」

• • •

—  
•  
•  
•  
—

「それなゆづらね。」

うん、いつまでもみていたいぐらいきれいだね、みづちゃん。

「そうね」

「おまえじかんかどいまへちゃえはいいの！」

「アリなのかな? じゃ、やつぱつじかんがとめりやくばっこじおもつんだ。そうすれば、やつらもずっとみれるし、おひやんじずっとこれ。だから、じかんかとあればこことおやつんだ。みつちやんは、おもわないの?」

「おもわないわね。だって、じかんがとあるとおおきくなれないじやない。」

「みつちゅんせ、せやくねんだになりたいの？」

「おとなにはなりたくないけど、はやくおおおれへはなりたいわね。あんたはおもわないの?」

「……ぼくは、たのしいときをずっといたい。それができるなら、おおしゃへないうちもいいかな。」

「」ん・・・」

「・・・」

「・・・」

「そりそり、かえりましようか。くらくなつちやうわ。」

「そりだね。かえろつか、みつちゃん。」

「・・・まちなさい。」

「へ、どうしたの？みつちゃん。」

「わたしは、これからずっとあなたのそばにいるわ。おねやくなつて、おとなになつても。」

「・・・うん！…みつちゃん、だいすき…」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

田を覚ますと知らない女性が居た。

「おやへよつやく、田を覚ましたか。」

田を覚ますと美女が居た田を覚ますと美女が居た大事な事だから一回言つたが今までに俺はこんな経験などしたはずがなく呆気にとられて思わず元の世界のモデルが足元にも及ばないレベルの美女を見ながらそりいえば此処の世界に来て出合つた人たち全員美女、美女少女でありますこの世界にはなんか美女成分が元の世界より絶対多めに

含まれてるよなとか、思った（ここまでに約0・5秒）がとりあえずなんか言わなければいけないと思い、俺の口から飛び出した言葉は、

「…………す、く、・・・美しいです。」

「ツー？」

阿部さんだった。

正直、これはどうなんだろう？諒助と付き合ひはじめて、いろんな事をあいつから教わったのだが、このセリフは確か、おホモ達に使う言葉だつたはず。

てか、スッゲエ恥ずかしい！自分でものすごい勢いで顔が熱くなつてくるのがわかる。

俺の顔を覗き込んでいた女性は、俺の言葉にポカンとし、固まってしまった。

これはイケナイと思い、フォローしようとするが、

「あ、いえ、これは、その・・・そうツー！あなたのその長くて綺麗な蒼い髪の事であつて！いや、あなた自身もとても綺麗であつて、思わず見とれてしまったものであり、」

アホな俺は何故か墓穴を掘るばかりのセリフを連発。誰か早く俺を止めてくれと神に頼むが、普段から神など信じていらないからだろうか、そんな奴は現れず、このまま永遠と続きそうな俺のセリフを止めたのは女性の笑い声だった。

「・・・くくく・・・あははははは！わかった、わかった！君の気持ちは十分わかつたから、落ち着きなさい。」

そう言って、爆笑していた女性は、目尻に涙を浮かべながらも俺に

冷たいタオルを手渡してくれた。

「す、すみません。」

手渡されたタオルで、さつきの今までの人生でトップの恥ずかしいセリフ + 女性に爆笑されたことで最早熱45度を越すんじゃないかと思つほど熱くなつた顔を冷やしながら、女性に謝つた。

「気にしないでくれ、別に謝らなくてもいいよ。褒められて悪い気はしないからね。ただ、ちょっと褒められすぎて笑つてしまつてね。・・」ちらりこそ、すまなかつた。」

さつきは爆笑されてしまつていたが、それはあくまで上品な笑い方であり、しかもわざわざ爆笑してしまつた事についても謝つてくれている。恐らくは、常識のある良い人なのである。そう思つと自然と顔の熱さも消えていった。

「いや、そちらの方こそ気にしないでください。つと、そういう助けて・・・貰つたんですね? どうもありがとうございました。」

段々と冷静になり、周りを見渡してみると、どうやら一軒家のようで、俺が寝ていたのであろう布団と、水が入つてゐる入れ物、それに掛かつてゐる幾つ物タオルがあつた。状況からして、俺はこの女性に助けてもらつたようなので、お礼を述べておく。

「いやいや、当然の事したまでだよ。それに助けたのは私ではなく、妹紅さ。」

「妹紅さん?」

「そうだ。知らないのか? 迷いの竹林の案内人として有名なはずだと思つたが・・・君も人里に住んでいるんだらう?」

何を言つてゐるんだい？とばかりに不思議そうな顔で俺を見てくる女性だが、生憎俺は迷いの竹林なんて知らないし、人里にもすんでいないし、妹紅つて人も知らない。

つてな事で、俺は正直に答えておく。諒助とかは、相手がここまでレベルの女性だ。調子に乗つて、知つたかをしるはすだ。だが、俺はそんな事しない！！結局、後々嘘がばれて取り返しの付かないことになるんだ。実体験を見たことのある俺は、ソレをよく知つてゐるからな。

「すいません、知らないです。俺、実は最近此処に来たもん、何も知らないんです。」

「最近此処に来た？・・・ああ！！君は外来人か！！」

その言葉で納得がいったつとばかりな顔をする女性。ガイライジンつて何だ？・・・そいえば博麗も言つていたな、俺達のことをガイライジンつて。多分、言葉からしてこの世界の住人じゃない奴のことを示すんじゃないか？恐らくは、”外”から”来”た”人”つてなことで、外来人つて呼ぶのだろう。

「はい、俺は外来人なんです。だから、此処のことは全然知らないで・・・」

「そりが・・・確かに君のその奇抜な格好は見ないからな。」

「いや、あなたも十分奇抜な格好してますけどね。普通、高校の制服みたいな物と、なんだか凄い形・・・五角形？の帽子に紅葉のような形をしたヒラヒラした物つけている人もそりそり居ませんよ。」

と、いうツッコミは心中でしておく。流石に、女性、しかもどんでもなく綺麗な女性にそういうことは言わない。諒助ではないが、

そういうのはキチンと弁えてる。てか、此処の世界の人はよくよく考えてみれば、皆凄い格好してるよな・・・博麗は脇が見えてる巫女服だつたし、八雲さんはヨーロッパ辺りの昔の貴族の御婦人が着てそうな服だつたし・・・

まあ、全員が全員、似合つてから、ツツコマナかつたけど。此処の世界の人たちは、美しい分、ファッションセンスが壊滅的なのでろう。そういえば、ある漫画の主人公が言つてたな、「人は何かを得るために、何かを犠牲にしなければならない。」とか、なんとか。あれか? 美しさを得る為に、ファッションセンスを犠牲にしてるのか?

「つと、なんか思考が九十度ずれたな。

「いかん・・・どこか諒助に毒されてる気分だ・・・

とりあえず気を取り直し、女性との会話に集中しよう。

「なら、君は私のことも知らなのではないか?」

「ええ、すみませんが・・・」

「いや、謝るのは私の方だな。君が人里の住民とばかりに思つて、自己紹介もせずにいたとは・・・君の服を見れば、君が外来人であろう事はすぐに分かつたのだろうが・・・すまない。」

この人メッチャヤクチャヤ律儀だな。こういう人が俺の好みなんだよなあ〜

つて、やづあい。また諒助並の思考に陥つている!?

本格的に俺は毒されてるな、とか全然関係ないことを思いながら話を進める。

「別に全然気にしてないんで、良いですよ。」

「そうか・・・なら、良かつた。私の名前は、かみじゅわ上白沢けいね慧音だ。よろしく。」

「俺の名前は、瀬尾 墓人。こちらこそ、よろしく。」

これが、俺と里の守護者である上白沢 慧音との出会いだった。

## 第7話 人里の守護者（後書き）

と、第7話でした。

正直に言つと今回の話で悪人にに対する印象が変わつたかもしませんが、元からこいつキャラなのでご勘弁してください。

今回の話は、タイトル名のごとくけーねとの出会いだったのですが、諒助たちは一切出できませんでした・・・悪人とけーねオンリーですみません。

悪人が何で諒助のことを心配しないの？とか、あいつら何しての？ってことは次話で出てくるんによろしくお願ひします。

### \* 蛇足

作者も東方の新作である 東方神靈廟 の体験版をつい最近プレイしたのですが、まさか一面ボスが幽々子様だとは思いませんでした

www

六面ボスのあつた幽々子様が一面ボスつて・・・今回の六面ボスが非常に気になりましたwww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7784p/>

東方捜真遊 ~Volost of a true fantasy~

2011年6月16日11時08分発行